

高木三家文書の現状と課題—高木家文書調査報告2013—

Current state and future agenda for Takagi Family Documents

名古屋大学附属図書館研究開発室
Nagoya University Library Studies

石 川 寛
ISHIKAWA, Hiroshi

Abstract

The Takagi Family Documents held at Nagoya University Library is a collection of old documents passed down through the Nishi-Takagi family, former retainers of the shogun. This collection is estimated to contain over 100,000 items. By 1989, Nagoya University had finished sorting through approximately 50,000 of these documents, details of which have been published in a 5-volume catalog. Following this, the current Nagoya University Library Studies took over the project of sorting through the remaining supplementary materials. In parallel to this process, initiatives were being taken to survey related documents from the Higashi-Takagi family and Kita-Takagi family, both of which are branch families; Nishi family documents that have been dispersed and documents that have been passed down through the families of former retainers. In addition, there are also Takagi Family Documents that have been collected in recent years. In addition to introducing new materials, this paper confirms the status of documents relating to the three Takagi families that have been obtained as a result of past activities and identifies future challenges that the project faces.

Keywords

Takagi Family Documents (高木家文書),

Takagi Family Documents Digital Library (高木家文書デジタルライブラリー)

I はじめに

名古屋大学附属図書館が所蔵する高木家文書は、美濃国石津郡時・多良両郷（現在の岐阜県大垣市上石津地域）を領有した旧旗本・西高木家の旧蔵文書群である。総点数は10万点にのぼると見積もられており、また木曾三川の治水関係資料が豊富に存在するなど、旗本家文書としてはほかに例をみない傑出した規模と内容を有している。

名古屋大学では1971（昭和46）年3月に高木家文書調査室を設置し、全学的事業として文書整理に取り組み、1982年度までに5万2409点の整理を終え、『高木家文書目録』巻一～五を刊行した（第1期）。

その後、1989（平成元）年度下四半期から、残された書状・書付類数万点の整理が総合研究資料館の活動の一環として再開された（第2期）。補

遺文書は、1万6000点余りの整理が済み、現在は附属図書館研究開発室が整理事業を引き継いでいる（第3期）。

2001年から事業を引き継いだ研究開発室では、補遺文書の整理に留まらず、高木家文書を中核とした木曾三川流域の歴史情報資源を体系化し共同利用を高度に推進することを目標の一つと定め、新しいデジタル技術を用いながら、高木家文書デジタルライブラリー⁽¹⁾の構築と横断的相互検索が可能なシステム環境の整備に取り組んでいる。

ところで、西高木家に伝来した文書群は附属図書館所蔵分ですべてではない。また、高木家は西・東・北の三家からなり、三家で交代寄合美濃衆を構成していた。したがって、高木家の全体像の理解に向けては、名古屋大学附属図書館所蔵の西高木家のみならず、東家・北家の文書調査および分散した西家文書の把握が不可欠である。このため補遺文書の整理に並行して関連文書の調査に

も取り組んできた。また、近年では旧家臣の家に伝来する文書群の調査にも着手している。

これまでの活動により確認できた高木三家に関連する文書群については斎藤夏来・秋山晶則により整理されている⁽²⁾。両氏の成果を踏まえ、さらに近年発見もしくは整理した新出資料を加え、現時点で把握している高木三家伝来の文書群をまとめたのが次の表である。ただし、目録が作成されているもの、もしくは現在作成中のもの、および研究開発室に撮影資料があり内容の確認ができるものに限定し、過去の報告書等で存在が紹介されながらも撮影資料がないものは除外してある。

これに関連して、これまでに発表された目録、報告書、展示図録、資料集などの成果物も一覧にした。本稿ではこれらの成果を受け継ぎ、新出資料の紹介を兼ねて高木三家文書の現状を確認し、今後の課題を整理する。

高木家文書の所在確認

家	所蔵機関・所蔵者	点数	目録・報告書
西家	名古屋大学附属図書館	目録刊行分	52409 『高木家文書目録』巻一～五、他に修復文書39点
		補遺（整理済）	16262 「高木家文書調査報告（補遺1～12）」
		補遺（未整理）	約30000 整理中
	大垣市教育委員会	福長氏旧蔵	2219 『福長氏旧蔵西高木家文書目録』、補遺69点を含む
		陣屋襖裏張り文書	約4000 整理中
	名古屋大学文学研究科	水野録次郎氏旧蔵	113 『高木家文書目録』巻五に目録掲載
	筒井稔氏		332 「筒井稔氏所蔵高木家文書目録」
	高木貞勝氏		109 「高木貞勝氏所蔵高木家文書」に目録掲載
			49 「高木家文書調査報告（補遺の五）」に目録（その二）掲載
			13 「高木家文書調査報告（補遺11）」に目録（補遺）掲載
市田靖氏（岐阜県歴史資料館寄託）		32 『岐阜県史 史料編 古代・中世一』に28点翻刻掲載 「高木家文書調査報告（補遺の四）」で3点紹介	
根岸茂夫氏		2 「高木家文書調査報告（補遺の三）」で紹介	
大垣市の個人蔵		95 「木曾三川流域における歴史情報資源調査（2005）」に仮目録掲載	
東家	森川勝之助氏	約5000	『川とともに生きてきたⅢ』で紹介
	筒井稔氏		9 「筒井稔氏所蔵高木家文書目録」
			122 「筒井稔氏所蔵東高木家文書」に目録掲載
			4 本稿で紹介
	徳川林政史研究所		84 閲覧室に備え付けの仮目録あり
	名古屋市蓬左文庫		2905 『名古屋市蓬左文庫古文書古繪圖目録』 点数はWebサイトの蔵書検索による
	大倉精神文化研究所		50 「大倉精神文化研究所所蔵 近世・近代文書目録（1）」
名古屋大学附属図書館		5 本稿で紹介	
北家	岐阜県の個人蔵	約3000	『川とともに生きてきたⅡ』で紹介
	筒井稔氏		2 「筒井稔氏所蔵高木家文書目録」
	小寺登氏		3 『小寺家文書目録』に掲載

目録・報告書類

第1期

『高木家文書調査報告』Ⅰ	名古屋大学附属図書館高木家文書調査室	1972年
『高木家文書調査報告』Ⅱ		1973年
『高木家文書調査報告』Ⅲ		1974年
『高木家文書調査報告』Ⅳ		1975年
『高木家文書調査報告』Ⅴ		1976年
『高木家文書調査報告』Ⅵ		1977年
『高木家文書調査報告』Ⅶ		1979年
『高木家文書目録』巻一	名古屋大学附属図書館 高木家文書調査室	1978年
『高木家文書目録』巻二		1979年
『高木家文書目録』巻三	名古屋大学附属図書館 高木家文書目録刊行調査室	1980年
『高木家文書目録』巻四		1981年
『高木家文書目録』巻五		1983年
西田真樹「高木家文書について」	『中部図書館学会誌』Vol.19 No.2	1978年
笹本正治「高木家文書目録の刊行を終えて—今後の問題点を中心に—」	『東海地区大学図書館協議会誌』28	1983年

第2期

伊藤孝幸「高木家文書調査報告（補遺の一）」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』7	1991年
伊藤孝幸「高木家文書調査報告（補遺の二）」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』8	1992年
伊藤孝幸「高木家文書調査報告（補遺の三）」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』9	1993年
伊藤孝幸「筒井稔氏所蔵高木家文書目録」		
伊藤孝幸「高木家文書調査報告（補遺の四）」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』10	1994年
伊藤孝幸「高木貞勝氏所蔵高木家文書」		
伊藤孝幸「高木家文書調査報告（補遺の五）」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』11	1995年
伊藤孝幸「筒井稔氏所蔵東高木家文書」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』12	1996年
伊藤孝幸「高木家文書調査報告（補遺の六）」		
秋山晶則「高木家文書調査報告（補遺の七）」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』13	1997年
秋山晶則「高木家文書調査報告（補遺の八）」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』14	1998年
秋山晶則「名古屋大学所蔵古文書の現況—高木家文書を中心に—」	『館燈』130/131	1999年
秋山晶則「高木家文書調査報告（補遺の九）」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』15	1999年
秋山晶則「高木家文書調査報告（補遺の十）」	『名古屋大学博物館報告』16	2001年

第3期

展示図録『川とともに生きてきた—高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術—』	名古屋大学附属図書館	2001年
展示図録『川とともに生きてきたⅡ—新発見史料・北高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術—』	名古屋大学附属図書館 附属図書館研究開発室	2003年
秋山晶則「高木家文書調査報告（補遺11）」	『名古屋大学附属図書館研究年報』1	2003年
秋山晶則「高木家文書調査報告（補遺12）」	『名古屋大学附属図書館研究年報』2	2004年
秋山晶則「木曾三川流域における歴史情報資源の研究と活用」	『LIBST Newsletter』4	2004年
展示図録『川とともに生きてきたⅢ—東高木家文書にみる木曾三川流域の歴史・環境・技術—』	名古屋大学附属図書館 附属図書館研究開発室	2004年
秋山晶則「木曾三川流域における歴史情報資源調査（2005年）」	『名古屋大学附属図書館研究年報』4	2006年
斎藤夏来「新出の旧旗本高木家屋敷図」	『LIBST Newsletter』15	2009年
展示図録『旗本高木家主従の近世と近代—高木家文書と小寺家文書—』	名古屋大学附属図書館 附属図書館研究開発室	2009年
斎藤夏来「高木家文書の高度活用における関連文書調査の意義」	『名古屋大学附属図書館研究年報』8	2010年
『小寺家文書目録』	大垣市教育委員会・名古屋大学附属図書館	2012年
『福長氏旧蔵西高木家文書目録』	大垣市教育委員会・名古屋大学附属図書館	2013年

購入までの経緯

中島俊司「高木文書の整理」	黒板博士記念会編『古文化の保存と研究』	1953年
伊藤孝幸「本学による高木家文書購入の顛末」	「高木家文書調査報告（補遺の二）」に収録	1992年
伊藤孝幸「名古屋大学による高木家文書購入の顛末」	『館燈』108	1992年
伊藤孝幸「戦後における近世史料類の収集過程—名古屋大学附属図書館所蔵高木家文書の場合—」	『歴史の理論と教育』89	1994年
伊藤孝幸「名古屋大学による高木家文書購入の一件について—文学部創設後の諸相を交えての聞き取り調査報告—」	『名古屋大学古川総合研究資料館報告』10	1994年

名古屋大学以外

『名古屋市蓬左文庫古文書古繪圖目録』	名古屋市蓬左文庫・名古屋市教育委員会	1976年
谷口昭「輪中村落の研究 史料編 東高木家文書（一）」	『名城法学』48-4	1999年
谷口昭「輪中村落の研究 史料編 東高木家文書（二）」	『名城法学』50-1・2	2001年
「大倉精神文化研究所所蔵 近世・近代文書目録（1）」	『大倉山論集』52	2006年
岡崎寛徳「交代寄合東高木家と幕府役人の書状—大倉精神文化研究所所蔵高木家文書（一）—」	『大倉山論集』52	2006年
岡崎寛徳「交代寄合東高木家と天正年間書状写—大倉精神文化研究所所蔵高木家文書（二）—」	『大倉山論集』53	2007年
『岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主屋等建造物調査報告書』	大垣市教育委員会	2009年
『岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡—測量調査・発掘調査報告—』	大垣市教育委員会	2013年

II 西高木家文書

1 文書の伝来

西高木家は維新後も多良に居住し、当主貞正は学区取締や郡長・衆議院議員などの公職を歴任してその社会的地位が保たれていたこと、また貞正・貞元父子による文書保存への努力もあって、所蔵文書は維新後も散逸することなく大切に保存されてきた。

大正末頃、高木家当主から文書の保存方法について意見を求められていた大垣の中島俊司が東京帝国大学の黒板勝美に相談したことが契機となって、1932（昭和7）年から黒板が所長を勤める日本古文化研究所の一事業として治水関係文書の目録採取がおこなわれ、5年間で計364冊、点数1万962点の目録を調製した。名古屋大学附属図書館にはこのときの調査記録が残っている。

これより先、東京大学の史料編纂掛が高木家を採訪し、貴重文書の影写本を作成していた。これについて本論で言及する。

戦後、高木家は財政整理上の理由から一部の記録類を市場に流出させたが、さいわい名古屋大学文学部教授中村栄孝のはからいで、市場に出まわっていた儀礼文書や村方支配文書を1949年度に購入し、あわせて中島が保管していた治水関係文書も購入、同大学附属図書館に収蔵した。その後、1957年度に至り、再び市場に出まわっていた

多量の文書類を購入し、10万点ちかい古文書・記録類が一括して名古屋大学附属図書館に収蔵されるに至ったのである。

ただし、西高木家に伝来したすべての文書が名古屋大学附属図書館の所蔵に帰したわけではなかった。

西高木家直系のご子孫である貞勝氏（2005年12月没）が戦後も処分することなく保持してきた文書が高木家に現存する。その現蔵文書すべてではないが、これまで3度にわたる調査により計171点の目録を公表した⁽³⁾。「家」に関わる文書を中心に手元に残したものと思われ、系譜や由緒書、戒名・忌日の一覧、東家・北家の先祖書写など、貴重な資料が多い。このためとくに重要と思われる12点が翻刻されている（「高木貞勝氏所蔵高木家文書」に掲載）。

附属図書館所蔵分とは別途流出し個人蔵となったものに、まず市田靖氏所蔵文書がある。現在は岐阜県歴史資料館に寄託されている同文書は、市田静馬氏が高木貞勝氏から譲渡されたものという⁽⁴⁾。戦国から織豊期・江戸初期の書状や知行宛行状など高木家の出自を証明する貴重な古文書ばかりであり、伊藤孝幸によって32点の存在が確認された⁽⁵⁾。

筒井稔氏所蔵文書は古書店経由で入手されたものである。筒井氏のご理解とご協力により調査・

整理を実施した結果、西家のみならず東家・北家がそれぞれ所蔵していたとみられる古文書を確認し、1993（平成5）年に目録で公表した。点数は西家332点、東家9点、北家2点である。西家に関しては附属図書館所蔵文書より古い時期の資料が含まれる。

根岸茂夫氏が所蔵するのは文政7（1824）年の「金銀錢御請取払覚帳」と「臨時御入用金銀錢御請取払覚帳」の2冊である。東京本郷の古書店で購入されたものという。「金銀錢御請取払覚帳」は附属図書館に文政6年分まで伝来しており、根岸氏の2冊はそれに続くものとなる。

名古屋大学文学部に寄贈された水野録次郎氏収集文書1225点のなかに高木家に関わる文書が113点含まれていた。水野氏が古書店から購入した文書とされ、見通し見分や系譜作成に関わる文書のほか、維新期の家臣の動静を示す文書が存在するのが注目される。附属図書館所蔵分とあわせて検討することで維新変革に対する高木家主従の動向を具体的に知ることができる。水野氏旧蔵文書については目録編纂時にすでに存在が知られており、『高木家文書目録』巻五の巻末に目録が掲載されている。

大垣市在住の方が所蔵する文書も西家から流出したとみられるものである。調査の結果95点を確認し仮目録を公表した。

このほか、西高木家陣屋跡に現存する主屋の襖裏張り文書がある。紙数にして約4000点が残っており、大垣市教育委員会から依頼をうけ、附属図書館研究開発室が整理に取り組んでいる。その内容は高木家関係と美濃国多芸郡石畑村（現養老町）の山幡源五兵衛関係の文書に大別されるようである。

2 修復文書

名古屋大学附属図書館所蔵の西高木家文書のなかには虫喰等で取り扱いが難しい文書が散見する。特に被害が著しいのは御用日記（F3-1）である。高木家の公的活動を把握する上で必須の資料ではあるが、状態が悪いため解読が進まずにいる。このため数年前から元興寺文化財研究所に依頼して修復に取り組み、ようやく40点近くの修復を終えた。

これとは別に、本来なら『高木家文書目録』に

掲載されてしかるべきところ、状態が悪いため開くことができず、そのため整理番号が付与されていない目録未掲載文書が発見された。これらは直ちに元興寺文化財研究所に依頼して修復を施し、改めて整理を試みた。その内容は以下の通りである。

①B2-1-156あ～51 に31点・包紙2点

②B2-1-156え～さ に1点

③B5-1-43あ～つ に7点（すべて包紙共）

①B2-1-156は幕末期の小物成取立に関する諸書付類である。紙袋一括で伝わる。目録には99点の文書が「あ～51」の枝番を付して掲載されている⁽⁶⁾。この99点とは別に、同じ156の紙袋のなから、包紙につつまれた数十点の未整理文書がみつかった。水濡れによる老けで固着・欠損が甚だしく、過去の整理のときに無理して開くことをせずに現状のまま保持したものと思われる。修復の結果、包紙2点と31点の文書であることがわかり、目録に続けて仮に52～82の枝番を付けて整理した。

②もB2-1-156の一括文書の一部である。「小穀一件」と書かれた包紙に9点の文書があり、そのうち比較的状态のよかった8点については「え～さ」の枝番が付されているが、1点は固着して開くことができない状態であった（したがってラベル＝整理番号も付いていない）。修復したところ「嘉永五年子十月小穀御石立相場覚」であることが判明したが、目録に続けて枝番を付けることはできず（「B2-1-156し」はすでに存在するため）、整理番号の付与は保留してある。

③は紙袋「時多良御領分諸願書一式入」の一括文書である。目録掲載分の18点（あ～つ）以外に、かなり脆い状態の文書の塊が入っていた。これは7点の堅紙が固着したものもある。修復後、いずれも包紙を伴う願書であることが判明したので目録に続けて「て～の」の枝番を仮に付けた。

以上の計39点が修復により新たに内容の解読が可能となった古文書である。目録刊行分52409点に39点が追加された形となった。1点ごとの内容については高木家文書デジタルライブラリーに登録して公開したいと考えている。

3 福長氏旧蔵西高木家文書

福長氏旧蔵文書は寄贈先の旧上石津町の依頼に

より附属図書館研究開発室が調査・整理に着手した西高木家伝来文書の一部である。上石津町が大垣市と合併した2006年度以降は大垣市の所蔵となり、大垣市教育委員会の依頼により調査を継続し、2013年3月に目録の刊行を終えた（目録の編集・解題担当は長屋隆幸）。点数は2150点、目録編纂中に追加の寄贈69点があり、合わせると2219点にのぼる。

福長氏旧蔵文書はすでに『上石津町史 史料編』（1975年）に75点が「岐阜市大池町 福長渡所蔵」として翻刻掲載されており、その存在自体は知られていた。だが、それが西高木家旧蔵文書の一部であることは明記されておらず（編集委員は当然知っていたであろうが）、文書群の性格と全貌が明らかとなったのは今回が初めてである⁽⁷⁾。

福長氏旧蔵文書は、1957年度に高木家から流出し名古屋大学が買い取った古文書の残りを福長氏が買い取ったものとみられる。したがって、この年に購入した附属図書館所蔵文書と福長氏旧蔵文書は西高木家の同じ蔵に保存されていた本来同一のまとまりをもった文書群である。それゆえ整理にあたっては両文書群の一体的な把握を可能とするため、附属図書館所蔵文書の目録である『高木家文書目録』の分類項目に準じた内容分類により本目録を作成した。

大項目ごとの点数は次の通りである（括弧内は追加寄贈分）。特定の分野にまとまっているわけではなく、その内容は多岐にわたっている。

A 領地	32 (6)
B 支配	260 (13)
C 家臣	119 (1)
D 勤役	199 (2)
E 治水	63 (0)
F 家政	546 (38)
G 財政	627 (1)
H 明治	76 (4)
I 書状・書付	228 (4)

分類項目に則した内容の詳細は目録解題を参照してもらいたい。特色のある資料としては、附属図書館所蔵分のみでは詳細がわからなかった文化14（1817）年の家老土屋舎人一件に関わる資料や蔵書家であった10代高木貞臧（冠山）の随筆や雑記が充実している。また、「高木系譜」は現存す

るなかではもっとも詳細な西高木家の系譜である。

Ⅲ 新出の西高木家屋敷図

西高木家の陣屋跡は1996（平成8）年に「旗本西高木家陣屋跡」として岐阜県の史跡に指定され、陣屋をめぐる石垣や歴代領主一族の墓石群、主屋や表門などの建造物が今に残されている。

上石津町との合併を契機に大垣市教育委員会は、名古屋大学附属図書館と連携した、陣屋跡の総合的調査に着手し、石垣測量、建造物調査、発掘調査、墓所調査および西高木家文書の悉皆調査と建築的観点からの検討、現地遺構との関連性の分析を進め、2冊の報告書を刊行した（高木陣屋についての記述はこの報告書による）。

江戸時代の西高木家屋敷は、天保3（1832）年3月に類焼し主要な建物をほぼ焼失するも、ただちに再建され、当主をはじめとする一家は同年12月に新築の上屋敷に移っている。下屋敷とその御門が造営されるのは嘉永5（1852）年である。安政4（1857）年には12代貞広が夫人を迎えるにあたり上屋敷・下屋敷が改修・拡張され、それが明治まで踏襲される。

さて、江戸時代の屋敷地の歴史の変遷を解明するうえで基準となる陣屋の全容を示した絵図に次の3点がある（資料名は仮に付けたものである）。

①天保焼失前屋敷図（176×276cm）

②天保再建屋敷図（180×158cm）

③安政普請屋敷図（220×265cm）

①は附属図書館所蔵文書に伝わる屋敷図である（名大F7-4-47）。敷地内にある諸建築の間取りと名称がわかるほか、多くの付箋により数次の改変も確認できる。

②は名古屋大学附属図書館が2010年度に古書店経由で入手した新出資料である。絵図には年紀や地名はいっさい記されてなく、古書店の情報では「美濃国加茂郡川辺村川辺大嶋家屋敷図」とあったが、屋敷地の地形からして西高木家のものであることは間違いない。嘉永5年建造の下屋敷が記載されていないこと、大奥北側部分の諸室が安政4年改修前の平面構成を示すこと、「表仮門」の記述などから、類焼後の天保3年再建時に関する屋敷図と推定される⁽⁸⁾。

③は前述の福長氏が古文書と一緒に旧上石津町

へ寄贈したものである。古文書とは入手ルートが異なることから、『福長氏旧蔵西高木家文書目録』には含めず、解題で紹介した。絵図は上屋敷と下屋敷の二つの主屋とその間取り、屋敷をめぐる石垣が描かれる。やはり年紀の記載はないものの、『主屋等建造物調査報告書』において安政4（1857）年の新規普請後の上屋敷・下屋敷を描いたものと比定され、詳細な検討がなされた。

なお、③の屋敷図には黒板勝美の借用書が共に伝わっている。前述したように黒板は1932（昭和7）年から西家文書の治水関係資料の目録採取に着手するが、それより前の1930年に屋敷図を借用し影写していたのである。黒板がこの屋敷図を高く評価していたことがうかがえる。

以上により、天保3年類焼前、類焼後の再建時、明治に踏襲される安政4年普請後の屋敷図が出そろったことになる⁽⁹⁾。3舗の屋敷図については、全体から微細部までの閲覧と比較検討を可能とするため高精細でデジタル撮影し、高木家文書デジタルライブラリーに搭載した。

IV 東高木家文書

1 文書の伝来

旗本高木家は貞政を共通の祖とし、2代貞久の次男貞利を西家初代、五男貞友を東家初代、末子養子の貞俊（貞久長男の息）を北家初代とする。三家は関ヶ原合戦における軍功により美濃国石津郡時・多良両郷に貞利2300石、貞友1000石、貞俊1000石が与えられて以降、明治維新まで270年近く同地を支配し続けた。

東高木家では13代達三郎（貞嘉）のときに明治維新を迎える。貞嘉は1914（大正3）年に死去、貞一が跡を継ぐが、1931（昭和6）年頃に多良から大阪へ転居したようである⁽¹⁰⁾。現在、多良の屋敷跡には土蔵1棟のみが残る。

東高木家文書は大阪転居前後に流出・分散したと考えられ、現在まで名古屋市蓬左文庫、徳川林政史研究所、大倉精神文化研究所、筒井稔氏、森川勝之助氏において所蔵されていることが明らかとなっている。

昭和の初め（1933年以前）に尾張徳川黎明会が2000点以上の東高木家文書を購入し⁽¹¹⁾、蓬左文庫の所蔵となった。財団法人尾張徳川黎明会（現在の公益財団法人徳川黎明会）は1931年に徳川義

親が設立、翌年には東京に蓬左文庫を設け、収集した文献史料の保存と一般公開への道筋を開いた。つまり、財団創設期に東家文書を入手したことになる。戦後、1950年に蓬左文庫は名古屋市に移譲され名古屋市蓬左文庫となったのにもない、蓬左文庫に付属していた歴史研究室は徳川林政史研究所として独立する。このとき東高木家文書の大半は名古屋市蓬左文庫の所蔵となったが、一部は財団に残され現在も徳川林政史研究所が保管している⁽¹²⁾。

蓬左文庫所蔵文書は、高木家文書調査室の調査では2165点と報告されているが⁽¹³⁾、蓬左文庫Webサイトの蔵書検索では2905点がヒットする。これは枝番とした挟込文書などもカウントするからである。いずれにせよ分散した東家文書のなかでは最大の規模を誇り、中核となるべき文書群である。御用日記や江戸留守居との往復書状留が比較的まとまって残っており、附属図書館所蔵の西家文書と補い合うものも多い。

徳川林政史研究所所蔵文書は閲覧室備え付けの仮目録では84件とある⁽¹⁴⁾。内容に目立ったまとまりがあるわけではないので、蓬左移譲分から分離した基準は明確でない⁽¹⁵⁾。このなかには数十件の他家文書と思しきものも存在する。また、目録上1件の文書も実際には合綴されたものがほとんどで、とくに「高木文書」と題された13の横帳は多数の書状・書付綴である。これらを1点ずつ目録採取すれば、他家文書を差し引いても、文書点数は相当数にのぼるとみられる。

大倉精神文化研究所所蔵文書は幕府役人奉書や天正年間の書状写などからなり、47点（枝番を含めると50点）が現存する。同研究所の記録によれば1942年に古書店から56点の「高木家諸記録」を一括購入したという。現存分については『大倉山論集』に目録と詳細な解説が載る。

筒井稔氏が所蔵する東高木家文書122点は、先に言及した目録公表後の1995（平成7）年に古書業者から購入されたものである。筒井氏のご好意によりただちに調査に入り、再び目録を公表した。今回の一群は、近年まで東高木家自身によって伝来されてきたと考えられ、他ではみられない年貢免状や多良屋敷図が含まれる。また、筒井氏は近年にも4冊の記録類を入手されたが、これは新出資料として後で紹介する。

森川氏は5000点を超える規模の治水関係資料をまとめて所蔵しており、準之助氏（現当主勝之助氏の祖父）が一括して搬入されたようである。森川家は高須輪中の豪農で、準之助氏は治水神社建立にも寄与されるなど木曾三川治水史に高い関心をもっていた人物であった。高木家と交際のある家とも姻戚関係にあったことから、散逸する可能性のあった治水文書を一括して引き受けたものと考えられている。天保期に整理されたときの文書箱もそのまま残されており、文書群の性格を考えるうえでも貴重である。すでに名城大学輪中研究会が解読と分析を進めており（『名城法學』に発表）、また名古屋大学附属図書館でも調査・整理に着手し、その成果の一部を2004年秋季特別展で公開するとともに貴重な治水関係絵図248件のメタデータとカラー画像を高木家文書デジタルライブラリーに搭載した。森川氏所蔵文書については目録刊行に向けて現在も調査中である。

2 新出の東高木家文書

2012年になり、9冊の新たな東高木家文書が確認された。詳細は以下の通りである（番号は便宜的に付した）。

A 筒井稔氏所蔵

- 1 内廻章留 第一番 明治2年3月改 公務方
- 2 内廻章留 第二番 明治2年5月改 公用方
- 3 御日記 明治2年従6月 公用方
- 4 御日記 明治3年正月吉日 東御役所

B 名古屋大学附属図書館所蔵

- 1 江戸御屋鋪御類焼一件 寛政6年正月10日
- 2 関根助右衛門江戸来状
文化7年（天保2年正月改）
- 3 江戸状往復案文扣 文政13年正月
- 4 江戸御留守居の差越候御用状
万延2年正月
- 5 江戸御留守居の差越候御用状
文久3年正月

Aの4冊は前述の筒井稔氏が古書店から購入されたものである。このたび筒井氏のご厚意により早速閲覧させていただき、内容を確認した。まずは筒井氏に対し、記してお礼申し上げる。

Bの5冊は名古屋大学附属図書館が購入した。AとBはそれぞれ紺の帙で包まれており、Aは裏打ちが施されていた。入手先の古書店は別であったが、帙の形状が似ていることから、両者の流出元は同じだった可能性も考えられる。

Aは新政府に帰順した高木家が京都に活動の場を移していた時期の記録である。

高木家は帰順旗本として知られ、王政復古後の慶応4（1868）年2月に三家は揃って上京・参内し帰順の姿勢を示した後、7月に再上京してからは明治3（1870）年6月頃まで実に2年近く京都に滞在した。この間、京都での周旋の結果、明治元年11月に本領安堵と中大夫への列席が実現するも、翌年12月に新政府が支配下に組み込んだ旧旗本層の禄制改革に着手したことで、高木三家の当主は4300石の知行地を上地されて領主権を喪失し、以後は地方官貫属士族として、西家当主は現米105石、東家・北家はそれぞれ現米75石の家禄を支給される存在となる⁽¹⁶⁾。

内廻章留（A-1,2）は京都住居を許された同列中（中大夫）の連絡留で、2冊で明治2年3～6月分を収録する。公用方の御日記（A-3）は中大夫時代の明治2年6月15日～10月3日、東御役所の御日記（A-4）は士族時代の明治3年正月元旦～3月8日の京都での記録である。

西家の維新期の記録類は、御用日記、登京日記、在京日記、公用取扱日記、朝廷御布告留などが附属図書館に現存し充実しているのに対して、東家の維新期の記録や古文書は数えるほどしかない。御日記も明治3年以降は残っていない。それだけに今回の4冊は貴重であり、維新期の東家の活動を探る手掛かりとなる。

Bはすべて江戸留守居に関する御用状留で構成される。B-1は寛政6（1794）年正月の桜田火事と称される大火によって類焼した江戸屋敷に関する留守居からの報告書綴である。蓬左文庫には文政6（1823）年や嘉永3（1850）年の江戸屋敷類焼に関する記録は存在するが、寛政年間の類焼記事は初見となる。

B-2,4,5は関根助右衛門ら江戸留守居からの御用状を綴った来翰留、B-3は多良から江戸への書状下書を控えた往翰留である。蓬左文庫には留守居方御用状（四-1-2）に分類された記録類が、享和2（1802）年から慶応3（1867）年分まで130冊

以上現存する。これらは“江戸留守居よりの御用状”と“江戸留守居への御用状案”がおおむね一年ごとに簿冊の形にまとめられている。ただし、欠年も少なくなく、B-2～5はその欠損を補うものであった。試しに幕末期の残存状況を記すと以下ようになる（①は江戸留守居よりの御用状、②は江戸留守居への御用状案）

	①	②
安政5（1858）年	前半欠 後半蓬左	蓬左
安政6（1859）年	蓬左	蓬左
安政7（1860）年	蓬左	蓬左
万延2（1861）年	名大	蓬左
文久2（1862）年	蓬左	蓬左
文久3（1863）年	名大	蓬左
文久4（1864）年	蓬左	蓬左
元治2（1865）年	蓬左	蓬左
慶応2（1866）年	蓬左	蓬左
慶応3（1867）年	蓬左	欠

新出の御用状には、文化8（1811）年に逝去する北家14代貞興の養子をめぐり記事や、万延2（1861）年に家督を相続した西家12代貞広の参府に関する記事も散見される。西高木家の留守居方御用状とあわせて検討することで、江戸における高木三家の活動の実態解明につながるものと期待される。

V 北高木家文書

北高木家に関しては、維新後早くに絶家となった、もしくは同地を離れたといわれている⁽¹⁷⁾。このため、関係文書は散逸してしまったものと考えられていたが、ある個人宅に3000点を上回る文書が保存されていることが確認された。その特徴としては、①西家文書等では比較的手薄な18世紀初頭の治水関係資料を数多く含むこと、②北家のみならず家臣の家文書も含む複合文書群であること、③旗本財政や幕末維新期の動向を示す資料が存在すること、である。その一部は名古屋大学附属図書館2003年春季特別展で紹介した。また、目録公開に先行して文書・絵図446件のメタデータを高木家文書デジタルライブラリーで公開している。

このほか、前述した通り、筒井氏所蔵文書のなかに本来ならば北家が所蔵していたとみられる古文書が2通存在する。さらに西高木家の家臣で

あった小寺家に伝来する文書群を整理するなかで、北高木家当主である求馬允貞宛の書状が3通含まれていることが確認された（小寺家文書15-301-2,3,4）。3通はすべて裏張りに転用された形跡が残る。明治になり小寺家は北高木家の屋敷地を購入しており、そのとき建具の裏張りからこれらの書状類を見出したことで現在の小寺家に伝わったのではないかと考えられている。

なお、『岐阜県史 史料編 古代・中世補遺』（1999年）に北高木家に関わる文書2通が翻刻されているが、これについては次章で説明する。

VI 史料編纂所の影写本と初期文書

1 史料探訪

高木三家には、それぞれの家に、戦国から織豊期・江戸初期にかけての古文書が伝来していた。斎藤義龍、織田信長・信忠・信雄、豊臣秀吉、徳川家康・秀忠などが高木家2代貞久や各家の祖にあたる貞利・貞友・貞俊にあてた書状・知行充行状等で、高木家の由緒を示すものとして各家で大切に保管されてきた（これらの古文書を便宜的に「初期文書」と呼ぶことにする）。高木家には豊富な治水資料のみならず、信長らの古文書が伝来していたことでも戦前から注目を集めていたのである。

このうち西家伝来の初期文書は、前記の通り、現在は市田氏の所蔵に帰し現存している。他方で東家および北家の初期文書は所在が不明となっているが、戦前に作成された影写本が東京大学史料編纂所に架蔵されており、それによって内容を知ることができる。そこで、史料編纂所のデータベースに従って、史料編纂所が所蔵する高木家文書の複本を整理しておいた。史料編纂所と高木家の関わりの発端は以下の通りである⁽¹⁸⁾。

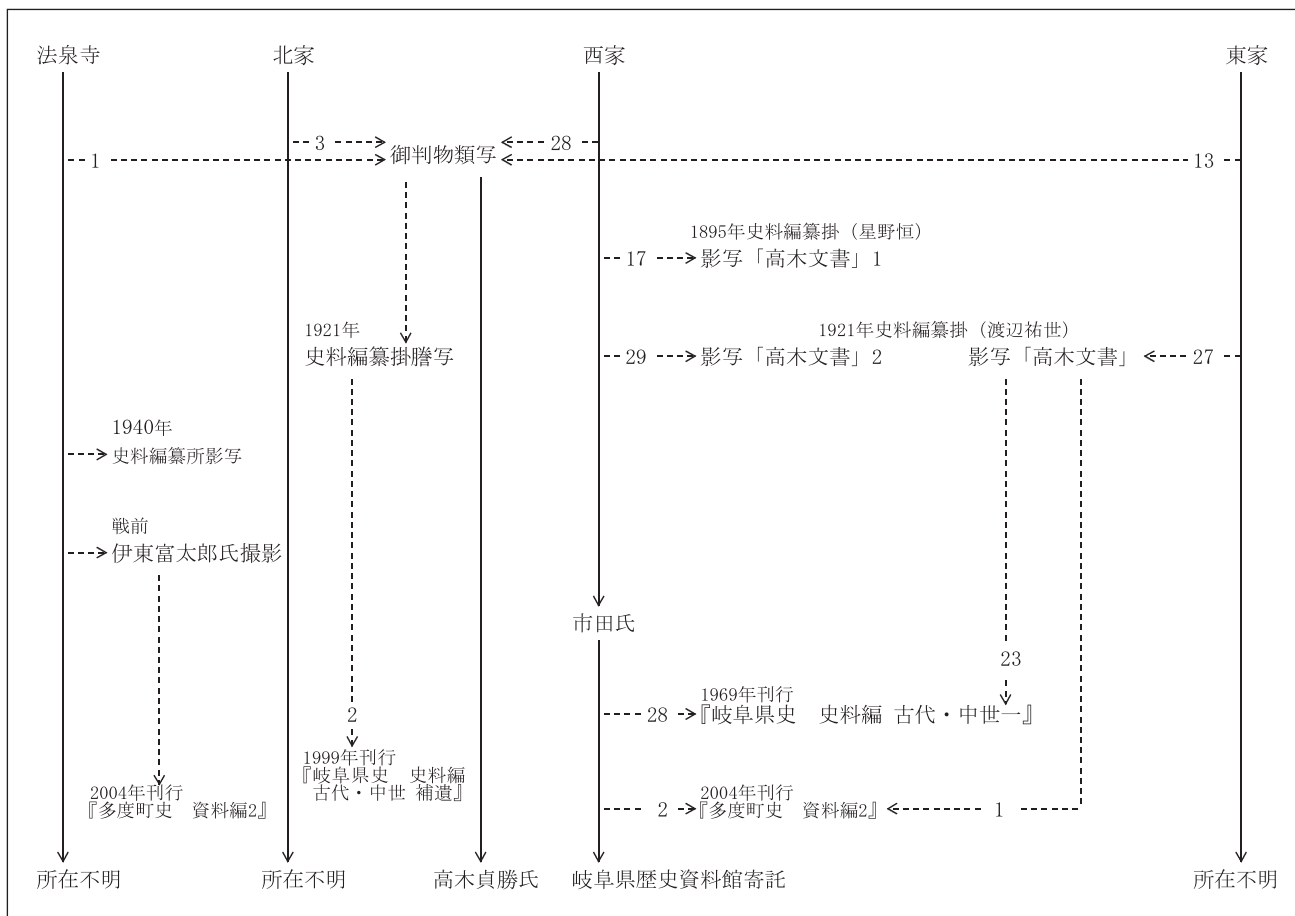
1895（明治28）年3月、帝国大学文科大学教授の星野恒は学術上取調のため愛知・岐阜両県への出張を命ぜられ、両県下を史料探訪した。4月になると帝国大学文科大学に史料編纂掛が設置され、星野は三上参事・田中義成とともに史料編纂委員となる。表にある1895年影写の「高木文書」1（文書17点）はこのときの星野の探訪によって得られた成果であろう。

次に1920（大正9）年10月、史料編纂官の渡辺祐世と史料編纂補助嘱託の高橋隆三が岐阜県西濃

東京大学史料編纂所の高木家文書

家別	種別	史料編纂所の標題 (原題、内容)	複本作成	原蔵者	原本	
東家	模写	朝鮮人來聘ノ節江戸席絵図	1921年	高木貞一		
東家	写真・模写	朝鮮国内裏并陣場之図	1921年	高木貞一		
東家	写真	大石良雄書状 九月十三日	1921年	高木貞一		
東家	謄写本	琉球人登城並上野御宮参詣行列	1921年	高木貞一		
東家	謄写本	高木家譜	1921年	高木貞一		
東家	謄写本	高木家譜 (書上系図書写先祖書)	1921年	高木貞一		
東家	謄写本	(先祖書)	1921年	高木貞一		
東家	謄写本	別本高木家譜 (〔系譜之内御尋之趣御答書])	1921年	高木貞一	(高木貞勝20v)	
東家	謄写本	高木・今村系図	1921年	高木貞一		
東家	影写本	高木文書 [文書27点]	1921年	高木貞一		
西家	写真	鮮陣渡海陣立 天正廿年三月十三日	1921年	高木貞元		
西家	謄写本	高木氏先祖書 (先祖書)	1921年	高木貞元	高木貞勝39	
西家	謄写本	高木氏旧記	(御判物類写)	1921年	高木貞元	高木貞勝18
			(先年ノ御用蒙仰候御奉書并諸書付等之写)			名大E1-1-4
			(先年ノ御用相勉候訳ケ等申上候書付)			
			(川通御用日記)			1922年
西家	影写本	高木文書	1 [文書17点]	1895年	高木貞元	
			2 [文書29点]			1921年

高木家の初期文書の変遷



実線は史料の移動、点線は写、算用数字は文書点数。

地方の史料採訪の一環として養老郡多良村の高木貞元家（西家）と高木貞一家（東家）を訪れ⁽¹⁹⁾、翌年3月に『大日本史料』編纂のため所蔵文書を借用した。筒井氏所蔵東高木家文書にはこのときの閲覧・貸出に関する書状が残っており、東家からの借用は26通・2冊・2枚・2巻・1軸・1箱にのぼった。こうして史料編纂掛において西家および東家所蔵文書の影写本等が作成されたのである。

2 初期文書の伝来

高木家伝来の初期文書の内容が広く一般に知られるようになるのは、1969年刊行の『岐阜県史 史料編 古代・中世一』に翻刻掲載されてからであろう。『古代・中世一』には、西家の初期文書として、前記の市田氏所蔵文書28点を市川靖氏所蔵として翻刻掲載する。史料編纂掛はこのうち10点を1895年に、残り18点を1921年に影写していた（影写本「高木文書」1,2）。

東家伝来の初期文書は県史編纂時にはすでに所在不明となっていたようで、『古代・中世一』では史料編纂所の影写本「高木文書」によって27点中23点を翻刻掲載した。東家の初期文書については現在でも所在がわからず、影写本によるほかない。写真では岐阜保勝会が1931年に発行した『岐陽遺文』に載る永禄10（1567）年11月付織田信長本領安堵状が唯一ではないだろうか。『岐陽遺文』は美濃に現存する信長関係資料の写真を蒐載したもので、高木家伝来の信長文書5通（西家伝来4通、東家伝来1通）を掲載する⁽²⁰⁾。信長350年忌に編纂され、数通の古文書の採否にあたっては渡辺世祐の指導を仰いだという。

その後、1999年に『岐阜県史 史料編 古代・中世補遺』が刊行されるにあたって北家に関わる初期文書が2点翻刻掲載された。これは史料編纂所の影写本『高木氏旧記』から引用したものである。『高木氏旧記』は西家で作成された「御判物類写」と川通役に関わる書付・日記の計4点からなり、補遺の2点は細かくいえば「御判物類写」からの引用になる。

「御判物類写」の原本は高木貞勝氏所蔵として現存する。その内容は高木三家伝来の初期文書45点を書き写したもので、書写するにあたって「本紙」（原本）の所在を記しており、初期文書の伝

来を考察するうえで有効である。本紙情報に従って45点を分類すると以下のようになる。

①本紙は西家	26点
②写が西家	1点
③本紙は東家	11点
④本紙は北家	3点
⑤本紙は法泉寺	1点
⑥本紙情報なし	3点

①は西家4代貞盛宛の古文書までを対象としている。②は慶長6（1601）年8月4日付大久保長安知行書立写で、本紙は寛永6（1629）年の朱印状と引き替えに幕府へ返却したので写のみが伝わった。これを含め西家が所持した27点中26点までが市田氏所蔵として『岐阜県史』に掲載される⁽²¹⁾。『岐阜県史』にみえない残り1点は、上総国内500石を充行とする慶長2年9月の知行充行状である。

③の11点については「本紙東家ニ持伝」、「本紙東家江遣し置」、「本紙東家江御先祖様被遣置候事」と伝来情報が書き分けられている。11点は天正年間までの斎藤義龍、織田信長・信忠・信孝・信雄、羽柴秀吉の書状・判物で、『岐阜県史』にすべて掲載されている（すなわち影写本「高木文書」に収録）。

北家が本紙を所持している文書は3点が書写されており（④）、『岐阜県史』の補遺はここから2点を翻刻したものである。『上石津町史 史料編』も同様に影写本「御判物類写」から同じ2点を翻刻掲載する。未掲載の1点は天正13（1585）年11月4日の織田信雄領知充行判物である。「御判物類写」からは北家にも初期文書が伝来していたことが知り得る。

なお、『養老郡志』（岐阜県地方改良協会養老郡支会、1925年）にも「高木文書」として初期文書33点が翻刻掲載されている。そこでは上記3通の北家伝来文書のほかに「北高木所有目下不明」と注記する6月29日付高木次郎兵衛宛阿部忠秋書状も掲載されている。郡志の編纂者である大久保休吾が、すでに所在不明となっていた北家文書を翻刻するにあたって何を根拠としたのかはわかっていない⁽²²⁾。

⑤は天正12年の小牧・長久手の戦いの際、駒

野城を守る高木貞利・貞友への援軍を法泉寺に命じたことを伝える織田信雄の8月19日付書状である。本紙を所持していた法泉寺は伊勢国桑名郡香取（三重県の旧多度町、現桑名市）に存在する高木家の檀那寺であった。法泉寺文書の伝存は現在明らかではないとされるが⁽²³⁾、史料編纂所の影写本と地元香取在住の伊藤富太郎氏が戦前に撮影した写真が残っている。『多度町史 資料編2』（2004年）は伊藤氏撮影写真により上記の織田信雄書状を翻刻掲載する。

⑥の本紙情報が記されていない3点のうち2点は天正19年の知行目録で、『岐阜県史』が掲載する東家の初期文書と同じである。県史未掲載の1点は11月4日付徳川家康書状であった（変遷表では仮に西家伝来に分類した）。

「御判物類写」には弘化3年の注意書きがあり、幕府に提出した先祖書との関連が推測される。西家の先祖書は次の3種に大別される。

- ⑦寛政3（1791）年（10代貞臧、名大F1-1-1）
- ⑧弘化3（1846）年（11代経貞、名大F1-1-7）
- ⑨元治2（1865）年（12代貞広、高木貞勝39）

寛政版⑦を増補改訂したのが弘化版⑧、それに貞広以降を追加したのが元治版⑨である。史料編纂掛が影写したのは⑨のみである。

3種を比較すると、幕府との問答にもとづき増訂を施したこともあり、⑦に比べて⑧の方が圧倒的に内容が豊富である。なかでも元祖貞政、2代貞久、3代貞利の記述の差は歴然で、⑦は貞利の箇所の家康判物を2通引用するに留まっているのに対し、⑧では初期文書を30通以上も引用しながら先祖の経歴を詳述している。

先祖書⑧の控の一つには「此御系譜書、寛政三亥年御先代様御書上ニ御准シ且従公儀認振之御手本ニ随イ、御先祖様方御頂戴之御判物等御両所様江茂御打合之上再御調御出来」との後書きがある⁽²⁴⁾。寛政期以降、高木三家は互いの初期文書を検討し合い先祖の事績を整理し先祖書を創り上げていったのである。「御判物類写」、そして同じく初期文書を収めた大倉精神文化研究所の天正書状写⁽²⁵⁾などは、こうしたなかで作成されたものと思われる。

なお、「御判物類写」、史料編纂所の謄写本、自

治体史の翻刻を見比べたところ読み方が違う箇所が散見し、また年代比定についても未確定の文書が存在する。高木三家における初期文書の伝来とその内容を確定していくことはまだ課題として残っている。

VII 一つの高木家文書に向けて

1 西高木家文書の統合

今回、附属図書館所蔵文書と本来一体であった福長氏旧蔵西高木家文書を、両者の関連性を分析しながら同一の分類項目で整理できたことは、分散した西高木家文書の統一的把握と本来もっていた構造の復元に向けての貴重な作業となった。

福長氏旧蔵文書については、現在の所蔵機関である大垣市教育委員会のご理解を得て、全点撮影とデジタル化をおこない、高木家文書デジタルライブラリーにメタデータと画像情報を登録し公開を始めている。

また、水野氏旧蔵文書は『高木家文書目録』巻五に掲載の目録ではとくに内容分類を施してなかったため、このたび新たためて分類をおこない、文学研究科の許可を得て、福長氏旧蔵文書同様にメタデータと画像情報を登録した。

中核となる附属図書館所蔵高木家文書の内容分類とフォーマットに従いメタデータを採取し、高木家文書デジタルライブラリーへ登録することで、分散した西高木家文書の統合と横断的な検索が可能となる。残りの西高木家文書についても、データベース登録への理解を求めていきたい。

ただし、登録への理解が得られたとしても、課題が残っている。筒井氏および大垣在住の方が所蔵する文書は、『高木家文書目録』の分類項目に則り目録を作成しているため統合上の支障はないが、高木貞勝氏所蔵文書は内容分類を施していない。現蔵文書が「黒塗文庫」や「家紋付木箱」に入って伝来しているため、原秩序を重視したものと思われる。そのため統合にあたっては、改めて内容分類をおこない、附属図書館所蔵分との関連性を明確にしなければならない。

また、高木家文書は近世初期の文書が意外と少なく、初期文書に適応できる分類項目がみあたらない。分散した文書の内容によっては『高木家文書目録』の分類項目の追加もしくは見直しも必要となってくる。

2 高木三家文書の統合

近年、デジタル技術の向上を背景に、複数の機関に分散して所蔵される大名家資料群を学界共有の研究資源として横断的な利用を可能とするための研究が始められている⁽²⁶⁾。

既述したように、高木家文書についても森川氏所蔵の東家文書および個人蔵の北家文書のうち関心の高い治水関係資料に限って『高木家文書目録』の分類項目を付与し、高木家文書デジタルライブラリーに登録することで西家の治水関係資料との統合を果たし横断的な検索を可能としている。

しかし、その他の高木三家文書については、各所蔵機関において目録作成やデータベース化が進められ、個人所有の文書群についても名古屋大学附属図書館が調査し目録を積極的に公開してきたものの、目録のフォーマットは必ずしも統一されているわけではなく、一つの「高木家文書」として統合できる状態にはなっていない。

もちろん、高木三家はそれぞれ個別に領主権を行使する存在であり、各家で生成され蓄積された文書群の性格は必ずしも同一ではない。資料整理の出所原則に従うなら、分散した文書の各家ごとの統合までに留めておくべきかもしれない。だが、高木家は三家で交代寄合美濃衆を形成し、美濃・木曾三川流域において公儀権力の一翼を担っていたことを踏まえれば、三家で生成された文書群を一体として把握することが「高木家」の特質を理解するうえで必要と考える。

分散した東家文書の統合にあたって中核となるのは蓬左文庫の分類目録であろう。この蓬左文庫所蔵の東高木家文書については、姉妹資料としての整理および利用上の利便を考慮して名古屋大学附属図書館と同じ方式による目録の作成をはかり、編集を名古屋大学で西家文書の整理に携わっていた2人に委嘱していた。したがって、蓬左文庫所蔵東高木家文書目録と附属図書館所蔵西高木家文書目録の分類項目は類似しており（項目表参照）、統合に向けた土台はできている。

各家の特色に応じた分類を生かしつつ、その上に統一の分類項目を設定し、三家文書を統合したデータベースの構築を試みていきたい。

(1) 名古屋大学附属図書館のエココレクション

ンデータベース (<http://libst1.nul.nagoya-u.ac.jp/eco/index.html>) 内に設置。

- (2) 斎藤夏来「高木家文書の高度活用における関連文書調査の意義」。『岐阜県指定史跡旗本西高木家陣屋跡 一測量調査・発掘調査報告書一』に収録の秋山晶則「第10章 交代寄合高木家文書にみる西高木家及びその文書群の位置と役割」。
- (3) 3度目の補遺目録は整理番号を67から始めているが、これは112から始めるのが正しい。「目録（その二）」を見落としのためのミスである。
- (4) 伊藤孝幸「本学による高木家文書購入の顛末」232頁。
- (5) 伊藤「高木家文書調査報告（補遺の四）」172頁。伊藤は32点のうち29点は『岐阜県史 史料編 古代・中世一』（1969年）や『上石津町史 史料編』（1975年）などに掲載されているとして残り3点を紹介しているが、『岐阜県史』に掲載されているのは28点であり、『上石津町史』掲載分はすべて『岐阜県史』が収録する。また、『岐阜県史 史料編 近世二』（1982年）に市田静馬氏所蔵の2点が掲載されているが、これは『古代・中世一』に収録の文書と同じものである。
- (6) 高木家文書目録の枝番は「あ」から始まり「わ」「ゐ」「ゑ」「を」「ん」までで48点、その後は「1」「2」「3」……と続いていく。したがって枝番51までの場合は合計99点となる。
- (7) ただし、今回整理した寄贈分と町史掲載資料を比較したところ、町史掲載分75点すべての存在を寄贈分のなかに確認することはできなかった。また、福長氏旧蔵文書の「高木系譜」（請求番号1-1-1）は町史では「宮 高木貞勝所蔵」として翻刻掲載されており（資料番号40）、多少の混乱もみられる。
- (8) 名古屋市立大学大学院の大橋正浩氏のご教示による。
- (9) 幕末から現存建築までの変遷について基準となる屋敷図については斎藤夏来「新出の旧旗本高木家屋敷図」が紹介している。

- (10) 伊藤孝幸「筒井稔氏所蔵東高木家文書」215～216頁。
- (11) 購入時期については、前掲・伊藤孝幸「戦後における近世史料類の収集過程」21頁による。
- (12) 以上の沿革については徳川林政史研究所 (<http://www.tokugawa.or.jp/institute/>) と名古屋市蓬左文庫 (<http://housa.city.nagoya.jp/index.html>) のWebサイトによる (Accessed 2013-08-29)。
- (13) 『高木家文書調査報告』Ⅲ、12～15頁。
- (14) ただし84番「諸凌米覚帳」は現在所在不明。
- (15) 書状類を除く文書の内容については『高木家文書調査報告』Ⅵ、13～17頁に報告がある。
- (16) 石川寛「交代寄合高木家主従の明治維新」(『名古屋大学附属図書館研究年報』8、2010年)。
- (17) 西高木家の明治期の日誌(名大H2-3)で正月の記事を追ったところ、1885年以降は正月の年賀先に北家の名前がみえなくなる。
- (18) 史料編纂掛の岐阜採訪については、『岐阜県史 史料編 古代・中世一』の「解説と解題」および『東京大学史料編纂所史料集』(東京大学史料編纂所、2001年)による。なお、史料編纂掛が史料編纂所と改称されるのは1929年である。
- (19) 渡辺の高木家訪問に同行した中島俊司によると、このとき東家当主の貞一はすでに神戸市に在住で、旧家臣が庫を開けて文書を見せたという(伊藤孝幸「本学による高木家文書購入の顛末」231頁)。
- (20) 掲載にあたっての関係資料が筒井氏所蔵東高木家文書に存在する。
- (21) 『岐阜県史 史料編 古代・中世一』に掲載される市田氏所蔵高木家文書のうち、天正20年3月13日付豊臣秀吉朱印陣立書と寛永6年8月8日付徳川秀忠知行充行朱印状は「御判物類写」に載っていないが、陣立書は存在することが明記されている。秀忠朱印状は西家5代貞勝宛なので対象外とされたのであろう。なお、後者の朱印状は『岐阜県史 史料編 近世二』にも掲載されるが(16号文書附)、そこでは家光の朱印状とされている。
- (22) 大久保が東高木家より資料を借用していたことは筒井氏所蔵東高木家文書によって確認できる。
- (23) 後掲『多度町史 資料編2』151頁。
- (24) 福長氏旧蔵西高木家文書5-55。
- (25) 岡崎寛徳「交代寄合東高木家と天正年間書状写」。天正書状写には15点の初期文書が収められる。内訳は「御判持類写」にもみえる西家11点、北家3点、法泉寺1点である。
- (26) 科学研究費助成事業・基盤研究(A)「宗家文書を素材とした分散所在大名家史料群の総合的研究」(研究代表者・鶴田啓)。

西高木家文書（名古屋大学附属図書館所蔵）

大項目	中項目	小項目
A領地	1知行地	(1)土地台帳
		(2)高帳
		(3)その他
	2戸口	(1)人別改
		(2)宗門改帳
		(3)宗門一札
		(4)人数増減
		(5)五人組
		(6)送り状
		(7)奉公人
(8)縁組願書		
(9)その他		
B支配	1年貢	(1)勘定目録
		(2)年貢関係願書
		(3)その他
	2諸役	(1)小物成
		(2)国役金
		(3)助郷
		(4)夫銀
		(5)その他
	3村政	(1)村況
		(2)村役人
		(3)村入用
		(4)出入
		(5)その他
	4法令	(1)幕法
		(2)家法
		(3)その他
	5願書	(1)願書
	6出入・吟味	(1)出入・吟味
	7一揆	(1)一揆
	8災害	(1)領内災害
(2)災害風聞		
9土木	(1)領内治水	
	(2)用水	
10林野	(1)山林	
	(2)山論	
11寺社	(1)由緒	
	(2)住職	
	(3)殿地	
	(4)勤行祭式	
	(5)檀家	
	(6)出入	
	(7)その他	
12救済・顕賞	(1)救済	
	(2)顕賞	
13交通	(1)通行	
	(2)運輸	
	(3)通信	
C家臣	1分限	(1)分限帳
		(2)扶持
		(3)土帳
	2勤仕	(1)取立・出仕
		(2)誓詞
		(3)勤向
		(4)退身
	3家	(1)相続
		(2)縁組
		(3)屋敷
4その他	(1)その他	
D勤役	1幕府	(1)沙汰書
		(2)留守居方御用状
		(3)幕府
	2参勤	(1)参府
		(2)初目見
		(3)仮養子
	3軍事	(1)軍役
		(2)軍備
		(3)武術

東高木家文書（蓬左文庫所蔵）

大項目	中項目	小項目
(一)領地	1知行地	(1)土地台帳
		(2)高帳
		(3)その他
2戸口	(1)人別改	
	(2)宗門改帳	
	(3)宗門一札	
	(4)人数増減	
	(5)五人組	
	(6)送り状	
	(7)奉公人	
(8)縁組願書		
(9)その他		
(二)支配	1年貢	(1)勘定目録
		(2)年貢関係願書
		(3)その他
	2諸役	(1)小物成
		(2)国役金
		(3)助郷
		(4)夫銀
		(5)その他
	3村政	(1)村況
		(2)村役人
		(3)村入用
		(4)出入
		(5)その他
	4法令	(1)幕法
		(2)家法
		(3)その他
	5願書	(1)願書
	6出入・吟味	(1)出入・吟味
	7一揆	(1)一揆
	8災害	(1)領内災害
(2)災害風聞		
9土木	(1)領内治水	
	(2)用水	
10林野	(1)山林	
	(2)山論	
11寺社	(1)由緒	
	(2)住職	
	(3)殿地	
	(4)勤行・祭式	
	(5)檀家	
	(6)出入	
	(7)その他	
12救済・顕賞	(1)救済	
	(2)顕賞	
13交通	(1)通行	
	(2)運輸	
	(3)通信	
(三)家臣	1分限	(1)分限帳
		(2)扶持
		(3)土帳
	2勤仕	(1)取立・出仕
		(2)誓詞
		(3)勤向
		(4)退身
	3家	(1)相続
		(2)縁組
		(3)屋敷
4その他	(1)その他	
(四)勤役	1幕府	(1)沙汰書
		(2)留守居方御用状
		(3)幕府
	2参勤	(1)参府
		(2)初而御目見
		(3)仮養子
	3軍事	(1)軍役
		(2)軍備
		(3)武術

大項目	中項目	小項目
E治水	1役儀	(1) 役儀
	2用水論所見分	(1) 用水論所見分
	3普請見廻	(1) 普請見廻
	4その他	(1) その他
F家政	1系譜	(1) 先祖書
		(2) 名書
		(3) 続書
	2家督	(1) 当家
		(2) 他家
	3日記	(1) 御用日記
		(2) 留守居方日記
		(3) 台所方日記
		(4) その他
	4書状	(1) 大老奉書
		(2) 老中奉書
(3) 側用人奉書		
(4) 若年寄奉書		
(5) 尾張藩用人奉書		
(6) 本願寺門跡書状		
(7) 書状留		
5交際	(1) 贈答留	
6規式	(2) その他	
7家作	(1) 規式	
	(1) 多良屋敷	
	(2) 江戸屋敷	
	(3) 調度品	
8書籍	(4) 屋敷図	
9学芸	(1) 書籍	
10吉事	(1) 学芸	
	(1) 婚姻	
11仏事	(2) 養子縁組	
	(1) 仏事	
G財政	1収支	(1) 収支見積
		(2) 蔵米収支
		(3) 金銭収支
		(4) 蔵物収支
	2村請支出	(1) 村請支出
	3借財	(1) 借財
		(2) 調達金
(3) その他		
4留守居方財政	(1) 留守居方財政	
5物産	(1) 取引	
6講	(2) 酒造株	
7その他	(1) 講	
	(1) 御出入方扶持	
H明治	1国事	(2) その他
		(1) 新政出仕
		(2) 学区取締
		(3) 郡長
2経営	(4) その他	
	(1) 家計	
	(2) 農業	
	(3) 日記	
I書状・書付	1近世	(4) その他
		(1) 幕府
		(2) 高木家
		(3) 他家
		(4) 社寺・公家
		(5) 百姓・町人
	(6) その他	
	2近代	(1) 一括
		(2) 高木家
		(3) 他家
3近世・近代	(4) その他	
	(1) 一括	
	(2) その他	

大項目	中項目	小項目
(五) 治水		
(六) 家政	1系譜	(1) 先祖書
		(2) 名書
		(3) 続書
	2家督	(1) 当家
		(2) 他家
		(3) その他
	3日記	(1) 御用日記
		(2) 当主日記
	4書状	
5交際		
6家作	(1) 多良屋敷	
7調度品	(2) 江戸屋敷	
8書籍		
9吉凶	(1) 婚礼・出産	
	(2) 養子縁組	
	(3) 仏事	
1収支	(1) 収支見積	
	(2) 蔵米収支	
	(3) 金銭収支	
2借財		
3調達金		
4留守居方財政		
5講		
(八) 明治		
(九) その他		
(一〇) 付録	1木曾川河口新田関係文書	
	2木曾川河口新田関係絵図	
	3笠松役所関係文書	
	4その他	